

子どもと青少年の問題行動と暴力に対する許容的態度

山口修司¹・越中康治²・中村多見²・
磯部美良・金山元春・前田健一

Problematic behaviors and favorable attitudes toward violence in children and adolescents

Shuji Yamaguchi, Kouji Etchu, Tami Nakamura,
Miyoshi Isobe, Motoharu Kanayama, and Kenichi Maeda

The aim of this study was to investigate the relationships between children's and adolescents' problematic behaviors and attitudes toward violence. Participants were 458 elementary school children (fifth- and sixth-graders), 521 junior high school students (first- and second-graders), and 1,164 high school students (first- and second-graders). They completed the questionnaire that consisted of three self-rating scales in order to assess their witnessing, desiring to experience, and making a judgment of problematic behaviors, and that consisted of a self-rating scale in order to assess attitudes toward violence such as favorable and unfavorable. The results showed that children and adolescents who reported favorable attitudes toward violence would be more likely to witness peers' problematic behaviors, and desire to experience problematic behaviors than those who reported unfavorable attitudes toward violence. Furthermore, those in the former group tended not to judge others' problematic behaviors wrong.

最近の少年非行は戦後第四の波を迎えたと言われている。平成12年の少年による主要刑法犯の検挙人員は前年に引き続き減少し、第三の波の時期に比べて多くはないが、強盗といった凶悪・粗暴な犯罪は増加する傾向にある。また、凶悪犯の集団化の進行や「普通の子」による「いきなり」型の非行が新たな特徴として目立っている(少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議,2001)。

このような現状を踏まえ、先の協力者会議は、日常的に目立つ前兆(髪型や服装の特徴、粗暴な言動、万引きなどの初発型非行、非行グループへの加入など)を示す児童生徒の問題行動への対応に加えて、一見「おとなしく目立たない」児童生徒が内面に不満やストレス等を抱え、ある要因に

1) 広島大学大学院教育学研究科研究生

2) 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

よってそれが爆発して起こる形の問題行動への対応が必要であると述べている(少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議, 2001)。

上記の指摘は、一見おとなしく目立たない児童生徒の問題行動がどのようなメカニズムで顕在化するのかを明らかにする研究、特に、日常的に目立つ非行の前兆につながるような心理的变化の解明が急務であることを示唆している。小嶋・松田(1999)は、こうした研究の1つである。小嶋・松田(1999)は中学1、2、3年生を対象にして、身体的・精神的暴力、逸脱行為に対する規範意識や欲求、加害・被害経験が暴力の発現とどのような関係にあるのかを学校への適応感や仲間に対する意識と関連づけて検討している。その結果から、(1)被害経験が暴力の発現に影響している可能性があること、(2)学校から逸脱し、友人から離れ、孤立している生徒は被害経験が多いだけでなく、暴力や逸脱行為に対する欲求が高く、規範意識も薄れており、実際にそれらの行為を行っている場合が多いことを指摘している。

総務庁青少年対策本部は、中学1年生から高校3年生までの一般少年と少年鑑別所に在所している20歳未満の非行少年を対象として、暴力観と非行に関する調査を行っている(総務庁青少年対策本部, 2000)。この調査では、非行少年をさらに、暴力非行少年(粗暴犯と凶悪犯のうち放火犯を除いた少年)とその他非行少年に分けている。暴力観を調べる質問項目は、(1)正当化(「人から暴力を振るわれるのは、その人が相手を怒らせるようなことをしているからだ」、「友達がやられた仕返しのためのけんかなら、仲間に加わるのは当然だ」など)、(2)大人不信(「暴力がはびこるのは、大人がだらしがないからだ」など)、(3)あきらめ(「今の社会では、強い者が弱い者を押しえつける仕組みになっていて、どうやってもいじめはなくなるならない」など)、の3つのカテゴリーから構成されていた。暴力観の得点は高くなるほど、暴力を肯定する傾向が高くなるように得点化されていた。その結果、一般少年では、「暴力がはびこるのは世の中の風潮や大人のせいだ」とする大人不信の傾向がみられた。それに対して、暴力非行少年では、「暴力を振るうのはそれなりの理由があるからだ」として暴力を正当化する考え方が強かった。

上述の研究(総務庁青少年対策本部, 2000)は、一般少年と非行少年の暴力観や暴力に対する態度や許容度が異なることを示している。この結果を参考にすると、一般少年の中でも暴力行為等の問題行動を示しやすい児童生徒とそうでない児童生徒では、暴力に対する許容度や暴力観に相違がみられるのではないかと考えられる。問題行動の実行が暴力に対する許容度を高めるのか、あるいは逆の因果関係にあるのかを解明するためにも、まず児童生徒の暴力に対する許容度や暴力観を調べ、暴力に対する許容度や暴力観の相違によって暴力行為等の問題行動に対する善悪判断や体験欲求がどのように異なるかを確かめておく必要がある。

そこで本研究では、生徒間暴力・器物損壊を含む暴力行為やいじめ問題、万引き・自転車盗等の窃盗、飲酒喫煙および規則違反の逸脱行動に関する問題行動に焦点を当て、これらの問題行動に関する児童生徒の見聞実態(どの程度見たり聞いたりしたことがあるか)、体験欲求(どの程度したいと思ったことがあるか)、善悪判断(どの程度悪いことだと思うか)および暴力に対する許容的態度を調べる。本研究の主な目的は、暴力に対する児童生徒の許容的態度の相違によって、多様な問題行動に関する見聞実態、体験欲求および善悪判断がどのように異なるかを検討することである。

方 法

対象者 広島県の小学校2校458名、中学校3校521名、高校2校1164名を対象にクラスごとに集団調査を実施した。この中から、許容度の得点(1項目当たりの平均得点)が全被験者の平均値よりも0.5SD以上の者を許容度高群、全被験者の平均値よりも0.5SD以下の者を許容度低群として選出した。その結果、群間比較の対象者数は小学校5・6年生287名(男157名、女130名)、中学校1・2年生322名(男179名、女143名)、高校1・2年生663名(男457名、女206名)となった。

質問項目 暴力に対する許容的態度(以下、許容度とする)の自己評定では、次の6項目を使用した。①相手から、たたかれたり、けられたら、やりかえしてもよい。②悪いことをする人をやっつけるためには、暴力をつかってよい。③規則を守らない人は、みんなにやっつけられてもしかたない。④みんなのじゃまをする人は、仲間はずれにされてもしかたない。⑤親は、子どもが言うことを聞かないときには、たたいてもよい。⑥言葉で注意しても聞かない人には、先生がたたいてもしかたない。

問題行動に関する見聞実態・体験欲求・善悪判断では、次の24項目を使用した。(1)人をなぐったり、けったりする。(2)そうじをなまける。(3)棒やナイフで人を傷つける。(4)たばこを吸う。(5)お酒やビールを飲む。(6)人をおどしたり、傷つくことを言う。(7)学校でアメやガムを食べたり、ジュースを飲む。(8)人をおどして、お金や物をとりあげる。(9)学校にナイフを持ってくる。(10)お金を払わないで、店から品物を取ってくる。(11)授業中に、さわいんだり、おしゃべりする。(12)わざと人の持ち物をこわしたり、かくしたりする。(13)人を仲間はずれにする。(14)人の自転車にだまって乗る。(15)人の欠点や知られたくないことを言って、からかう。(16)わざと学校のガラスや壁をこわす。(17)机や椅子に、落書きをする。(18)人のいやなこと、やりたくないことを無理にやらせる。(19)犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける。(20)髪の毛を染めたり、パーマをかける。(21)授業中に、かってに教室を出たり入ったりする。(22)人の傘や持ち物をかってに使う。(23)廊下で、さわいんだり遊んだりして教室の授業をじゃまする。(24)テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える。

手続き 許容度に関する6項目については、「あなたはどのくらい賛成しますか、反対しますか」と質問し、6段階で評定させた。24項目の問題行動に関する見聞実態では、「あなたがかよっている学校や学校の外で、あなたと同じ年くらいの人が次のことをしているのを見たり聞いたりしたことがありますか」と質問した。体験欲求では、「あなたは、これまでに『しよう』とか『してみたい』というきもちになったことがありますか」と質問した。善悪判断では「友達が次のことをしていたら、あなたはそれをどれくらい悪いことだと感じますか」と質問した。見聞実態、体験欲求、善悪判断のいずれの項目についても、「まったくない(悪くない)」(1点)～「とてもたくさんある(悪い)」(6点)の6段階で評定させた。

結果

問題行動に関する見聞実態・体験欲求・善悪判断の各項目別平均値に基づいて、許容度(高・低)×学校(小・中・高)の分散分析を行った。表1は見聞実態、表2は体験欲求、表3は善悪判断に関する項目別平均値を、許容度と学校別に示したものである。なお、以下の記述では、本研究の直接の目的である暴力に対する許容度と関連する結果のみを扱う。学校種間差の発達の検討については別の論文で報告する。

(1)見聞実態

24項目別に2(許容度)×3(学校)の2要因分散分析を行った。その結果、許容度の主効果(いずれも $df=1$, 1266)は、見聞実態すべての項目で有意であった。項目1($F=54.49$, $p<.001$)、項目2($F=43.05$, $p<.001$)、項目3($F=28.24$, $p<.001$)、項目4($F=18.97$, $p<.001$)、項目5($F=32.21$, $p<.001$)、項目6($F=55.15$, $p<.001$)、項目7($F=22.52$, $p<.001$)、項目8($F=22.77$, $p<.001$)、項目9($F=11.03$, $p<.001$)、項目10($F=25.85$, $p<.001$)、項目11($F=32.16$, $p<.001$)、項目12($F=60.60$, $p<.001$)、項目13($F=53.67$, $p<.001$)、項目14($F=31.85$, $p<.001$)、項目15($F=67.22$, $p<.001$)、項目16($F=37.35$, $p<.001$)、項目17($F=60.11$, $p<.001$)、項目18($F=70.90$, $p<.001$)、項目19($F=26.20$, $p<.001$)、項目20($F=16.89$, $p<.001$)、項目21($F=40.07$, $p<.001$)、項目22($F=13.91$, $p<.001$)、項目23($F=23.14$, $p<.001$)、項目24($F=40.20$, $p<.001$)。

これら24項目すべてにおいて、許容度高>許容度低であった。項目別に許容度高群と低群の各平均値を示すと、以下のとおりである。項目1：許容度高(3.49)>許容度低(2.80)。項目2：許容度高(4.51)>許容度低(3.93)。項目3：許容度高(1.56)>許容度低(1.25)。項目4：許容度高(2.71)>許容度低(2.25)。項目5：許容度高(2.64)>許容度低(2.07)。項目6：許容度高(3.56)>許容度低(2.81)。項目7：許容度高(3.90)>許容度低(3.43)。項目8：許容度高(1.78)>許容度低(1.43)。項目9：許容度高(1.46)>許容度低(1.27)。項目10：許容度高(2.12)>許容度低(1.67)。項目11：許容度高(4.76)>許容度低(4.22)。項目12：許容度高(2.78)>許容度低(2.08)。項目13：許容度高(3.25)>許容度低(2.55)。項目14：許容度高(2.23)>許容度低(1.72)。項目15：許容度高(3.44)>許容度低(2.62)。項目16：許容度高(1.86)>許容度低(1.42)。項目17：許容度高(3.74)>許容度低(2.93)。項目18：許容度高(2.76)>許容度低(2.02)。項目19：許容度高(1.65)>許容度低(1.34)。項目20：許容度高(3.34)>許容度低(2.88)。項目21：許容度高(2.44)>許容度低(1.83)。項目22：許容度高(2.27)>許容度低(1.92)。項目23：許容度高(2.72)>許容度低(2.25)。項目24：許容度高(2.41)>許容度低(1.85)。

許容度×学校の交互作用(いずれも $df=2$, 1266)は、次の3項目で有意であった。項目17($F=5.85$, $p<.005$)、項目20($F=3.65$, $p<.05$)、項目24($F=4.15$, $p<.05$)。有意な交互作用がみられた3項目について、まず学校別に許容度の単純主効果を検定した。その結果、許容度高>許容度低の結

果は、項目17の小と中(ともに $p < .001$)、項目20の小($p < .001$)、項目24の小と高(ともに $p < .001$)でみられた。

次に、許容度別に学校間差を検定した。その結果、第1パターン(小<中<高、小≠中<高)を示したのは、項目20の許容度低(小<中<高、 $p < .05$)と許容度高(小≠中<高、 $p < .05$)であった。また、逆の第2パターンを示したのは、項目17の許容度高(高<小≠中、 $p < .05$)、項目24の許容度低(中≠高く小、 $p < .05$)および許容度高(中≠高く小、 $p < .05$)であった。

表1 問題行動の見聞実態に関する項目別平均値(SD)

項目	許容度低群			許容度高群		
	小学校 (N=189)	中学校 (N=215)	高校 (N=269)	小学校 (N=98)	中学校 (N=107)	高校 (N=394)
1	3.04(1.55)	3.10(1.33)	2.26(1.37)	3.77(1.47)	3.75(1.31)	2.97(1.64)
2	3.67(1.27)	4.21(1.31)	3.93(1.53)	4.52(1.25)	4.66(1.31)	4.36(1.48)
3	1.16(0.61)	1.31(0.80)	1.27(0.71)	1.52(1.15)	1.60(1.08)	1.55(1.12)
4	1.36(1.02)	2.27(1.62)	3.12(1.85)	1.47(1.16)	2.95(1.70)	3.70(1.91)
5	1.43(0.97)	1.85(1.33)	2.94(1.72)	2.13(1.59)	2.28(1.45)	3.51(1.85)
6	2.65(1.59)	3.15(1.58)	2.63(1.55)	3.59(1.66)	3.79(1.68)	3.30(1.61)
7	2.00(1.37)	3.64(1.80)	4.64(1.67)	2.74(1.63)	4.05(1.61)	4.91(1.44)
8	1.24(0.75)	1.50(1.07)	1.56(1.05)	1.55(1.15)	1.83(1.20)	1.96(1.41)
9	1.18(0.70)	1.38(0.96)	1.25(0.81)	1.40(1.10)	1.59(1.05)	1.40(0.99)
10	1.43(0.98)	1.68(1.27)	1.90(1.35)	1.90(1.26)	2.21(1.56)	2.25(1.59)
11	3.92(1.51)	4.63(1.39)	4.10(1.61)	4.72(1.46)	5.09(1.26)	4.46(1.57)
12	2.24(1.39)	2.29(1.41)	1.71(1.11)	3.08(1.70)	3.04(1.53)	2.21(1.51)
13	2.69(1.47)	2.81(1.56)	2.16(1.31)	3.54(1.62)	3.62(1.52)	2.59(1.59)
14	1.40(0.94)	1.87(1.30)	1.89(1.32)	1.91(1.47)	2.36(1.59)	2.41(1.63)
15	2.47(1.49)	2.96(1.59)	2.44(1.44)	3.48(1.66)	3.72(1.63)	3.11(1.64)
16	1.49(1.08)	1.51(1.07)	1.26(0.70)	1.84(1.47)	2.00(1.49)	1.75(1.26)
17	2.97(1.72)	3.08(1.68)	2.73(1.60)	4.11(1.86)	4.07(1.57)	3.04(1.63)
18	2.00(1.38)	2.23(1.38)	1.83(1.19)	2.95(1.58)	2.94(1.51)	2.38(1.44)
19	1.50(1.09)	1.30(0.80)	1.20(0.58)	1.71(1.25)	1.75(1.18)	1.49(1.09)
20	2.01(1.41)	2.88(1.84)	3.76(1.84)	2.88(1.76)	3.17(1.64)	3.96(1.80)
21	1.50(1.04)	2.15(1.51)	1.86(1.43)	2.40(1.62)	2.59(1.65)	2.32(1.66)
22	1.47(0.96)	1.94(1.34)	2.35(1.56)	1.91(1.49)	2.08(1.31)	2.81(1.69)
23	2.27(1.48)	2.53(1.53)	1.95(1.39)	2.99(1.71)	2.75(1.61)	2.41(1.59)
24	2.25(1.51)	1.69(1.24)	1.60(1.09)	3.14(1.73)	1.95(1.33)	2.14(1.57)

(2)体験欲求

24項目別に2(許容度)×3(学校)の2要因分散分析を行ったところ、許容度の主効果(いずれも $df = 1, 1266$)は、体験欲求すべての項目で有意であった。項目1($F = 176.04, p < .001$)、項目2(F

=94.35, $p < .001$)、項目3 ($F=42.65$, $p < .001$)、項目4 ($F=49.32$, $p < .001$)、項目5 ($F=66.00$, $p < .001$)、項目6 ($F=125.25$, $p < .001$)、項目7 ($F=45.69$, $p < .001$)、項目8 ($F=45.59$, $p < .001$)、項目9 ($F=17.89$, $p < .001$)、項目10 ($F=36.06$, $p < .001$)、項目11 ($F=63.45$, $p < .001$)、項目12 ($F=87.50$, $p < .001$)、項目13 ($F=135.72$, $p < .001$)、項目14 ($F=41.53$, $p < .001$)、項目15 ($F=143.01$, $p < .001$)、項目16 ($F=62.90$, $p < .001$)、項目17 ($F=58.07$, $p < .001$)、項目18 ($F=115.21$, $p < .001$)、項目19 ($F=34.05$, $p < .001$)、項目20 ($F=24.44$, $p < .001$)、項目21 ($F=35.59$, $p < .001$)、項目22 ($F=22.09$, $p < .001$)、項目23 ($F=46.80$, $p < .001$)、項目24 ($F=52.70$, $p < .001$)。

これら24項目すべてにおいて、許容度高>許容度低であった。項目別に許容度高群と低群の各平均値を示すと、以下のとおりである。項目1：許容度高(3.15)>許容度低(1.91)。項目2：許容度高(4.08)>許容度低(3.08)。項目3：許容度高(1.52)>許容度低(1.12)。項目4：許容度高(1.94)>許容度低(1.32)。項目5：許容度高(2.83)>許容度低(1.95)。項目6：許容度高(2.52)>許容度低(1.58)。項目7：許容度高(3.46)>許容度低(2.71)。項目8：許容度高(1.50)>許容度低(1.09)。項目9：許容度高(1.31)>許容度低(1.09)。項目10：許容度高(1.79)>許容度低(1.32)。項目11：許容度高(3.91)>許容度低(3.06)。項目12：許容度高(1.97)>許容度低(1.31)。項目13：許容度高(2.62)>許容度低(1.64)。項目14：許容度高(1.73)>許容度低(1.25)。項目15：許容度高(2.53)>許容度低(1.56)。項目16：許容度高(1.71)>許容度低(1.15)。項目17：許容度高(3.06)>許容度低(2.26)。項目18：許容度高(2.12)>許容度低(1.33)。項目19：許容度高(1.35)>許容度低(1.07)。項目20：許容度高(2.78)>許容度低(2.20)。項目21：許容度高(1.83)>許容度低(1.35)。項目22：許容度高(1.67)>許容度低(1.31)。項目23：許容度高(1.89)>許容度低(1.38)。項目24：許容度高(2.13)>許容度低(1.50)。

許容度×学校の交互作用(いずれも $df=2$, 1266)は、次の10項目で有意であった。項目2 ($F=6.95$, $p < .001$)、項目4 ($F=3.59$, $p < .05$)、項目5 ($F=3.43$, $p < .05$)、項目7 ($F=11.49$, $p < .001$)、項目11 ($F=3.89$, $p < .05$)、項目16 ($F=4.05$, $p < .05$)、項目20 ($F=5.77$, $p < .005$)、項目21 ($F=5.80$, $p < .005$)、項目23 ($F=5.34$, $p < .005$)、項目24 ($F=3.56$, $p < .05$)。有意な交互作用がみられた10項目について、まず学校別に許容度の単純主効果を検定した。その結果、許容度高>許容度低の結果は、項目2の小と中と高(ともに $p < .001$)、項目4の小と高(ともに $p < .001$)、項目5の小と中と高(ともに $p < .001$)、項目7の小と高(小は $p < .001$ 、高は $p < .01$)、項目11の小と中と高(小と高は $p < .001$ 、中は $p < .005$)、項目16の小と中と高(小と高は $p < .001$ 、中は $p < .05$)、項目20の小($p < .001$)、項目21の小と高(ともに $p < .001$)、項目23の小と高(ともに $p < .001$)、項目24の小と中と高(小と高は $p < .001$ 、中は $p < .05$)でみられた。

次に、許容度別に学校間差を検定した。その結果、第1パターン(小<中<高、小≒中<高または小<中≒高、中<高、小<中を含む)を示したのは、項目4の許容度低(小<中≒高、 $p < .05$)と許容度高(小≒中<高、 $p < .05$)、項目5の許容度低(小<中<高、 $p < .05$)と許容度高(中<高、 $p < .05$)、項目7の許容度低(小<中<高、 $p < .05$)と許容度高(小≒中<高、 $p < .05$)、項目20の許容度低(小<中<高、 $p < .05$)と許容度高(小≒中<高、 $p < .05$)、項目21の許容度低(小<中、 $p < .05$)であった。また、逆の第2パターン(小≒中>高または小>中≒高を含む)を示したのは、項目11の許

容度高(小<中>高、 $p < .05$)、項目23の許容度高(小>中<高、 $p < .05$)、項目24の許容度高(小>中<高、 $p < .05$)であった。第3パターン(中>小<高、中>高>小を含む)を示したのは、項目2の許容度低(中>高>小、 $p < .05$)、項目11の許容度低(中>小<高、 $p < .05$)であった。

表2 問題行動の体験欲求に関する項目別平均値(SD)

項目	許容度低群			許容度高群		
	小学校 ($N=189$)	中学校 ($N=215$)	高校 ($N=269$)	小学校 ($N=98$)	中学校 ($N=107$)	高校 ($N=394$)
1	2.04(1.33)	1.97(1.28)	1.71(1.18)	3.21(1.76)	3.36(1.57)	2.88(1.72)
2	2.67(1.43)	3.47(1.49)	3.10(1.70)	4.18(1.64)	4.08(1.61)	3.97(1.71)
3	1.03(0.25)	1.19(0.77)	1.15(0.72)	1.47(1.14)	1.52(1.10)	1.57(1.27)
4	1.05(0.33)	1.40(1.04)	1.51(1.23)	1.81(1.53)	1.68(1.30)	2.32(1.89)
5	1.51(1.11)	1.93(1.45)	2.42(1.74)	2.79(1.85)	2.55(1.75)	3.16(1.99)
6	1.58(1.02)	1.67(1.11)	1.48(0.98)	2.44(1.57)	2.68(1.48)	2.42(1.63)
7	1.56(1.08)	2.81(1.75)	3.77(1.95)	3.04(2.08)	3.05(1.81)	4.29(1.76)
8	1.01(0.07)	1.15(0.63)	1.12(0.59)	1.38(1.08)	1.51(1.13)	1.60(1.34)
9	1.00(0.00)	1.17(0.80)	1.11(0.62)	1.26(0.90)	1.32(0.87)	1.36(1.07)
10	1.16(0.58)	1.46(1.11)	1.35(0.96)	1.59(1.28)	1.83(1.39)	1.94(1.57)
11	2.79(1.55)	3.47(1.66)	2.91(1.72)	4.06(1.69)	4.07(1.61)	3.60(1.79)
12	1.32(0.77)	1.45(0.87)	1.18(0.61)	2.12(1.59)	1.96(1.37)	1.81(1.36)
13	1.70(0.99)	1.88(1.29)	1.35(0.77)	2.87(1.80)	2.88(1.73)	2.11(1.51)
14	1.05(0.29)	1.29(0.88)	1.40(1.06)	1.58(1.30)	1.75(1.42)	1.86(1.51)
15	1.50(0.90)	1.81(1.19)	1.38(0.79)	2.47(1.53)	2.89(1.68)	2.23(1.53)
16	1.06(0.35)	1.29(0.95)	1.08(0.53)	1.83(1.64)	1.58(1.30)	1.71(1.47)
17	2.34(1.57)	2.42(1.63)	2.00(1.48)	3.46(2.00)	3.09(1.88)	2.63(1.73)
18	1.30(0.73)	1.42(0.94)	1.26(0.69)	2.08(1.65)	2.26(1.52)	2.02(1.44)
19	1.07(0.31)	1.07(0.41)	1.06(0.30)	1.42(1.24)	1.28(0.77)	1.34(1.04)
20	1.44(1.07)	2.30(1.82)	2.85(1.99)	2.59(2.06)	2.61(1.95)	3.15(2.04)
21	1.19(0.61)	1.54(1.28)	1.33(0.94)	1.97(1.71)	1.65(1.28)	1.86(1.52)
22	1.12(0.52)	1.33(0.95)	1.47(1.14)	1.45(1.05)	1.51(1.07)	2.05(1.66)
23	1.32(0.74)	1.54(1.13)	1.28(0.80)	2.15(1.68)	1.79(1.34)	1.73(1.38)
24	1.60(1.00)	1.51(1.18)	1.39(1.03)	2.52(1.88)	1.86(1.54)	2.02(1.64)

(3) 善悪判断

24項目別に2(許容度)×3(学校)の2要因分散分析を行った。許容度の主効果(いずれも $df=1$, 1266)は、項目3と項目19を除く次の22項目で有意であった。項目1($F=45.36$, $p < .001$)、項目2($F=6.45$, $p < .05$)、項目4($F=21.65$, $p < .001$)、項目5($F=30.29$, $p < .001$)、項目6($F=17.30$, $p < .001$)、項目7($F=16.14$, $p < .001$)、項目8($F=4.06$, $p < .05$)、項目9($F=13.31$, $p < .001$)、項目10($F=9.03$, $p < .005$)、項目11($F=8.89$, $p < .005$)、項目12($F=7.93$, $p < .005$)、項目13($F=$

30.17, $p < .001$)、項目14($F=7.30$, $p < .01$)、項目15($F=32.78$, $p < .001$)、項目16($F=11.56$, $p < .001$)、項目17($F=32.48$, $p < .001$)、項目18($F=20.90$, $p < .001$)、項目20($F=36.03$, $p < .001$)、項目21($F=25.87$, $p < .001$)、項目22($F=10.79$, $p < .005$)、項目23($F=29.05$, $p < .001$)、項目24($F=15.37$, $p < .001$)。これら22項目すべてにおいて、許容度低>許容度高であった。項目別に許容度低群と高群の各平均値を示すと、以下のとおりである。項目1：許容度低(5.05)>許容度高(4.57)。項目2：許容度低(3.92)>許容度高(3.72)。項目4：許容度低(4.95)>許容度高(4.52)。項目5：許容度低(4.53)>許容度高(3.98)。項目6：許容度低(5.13)>許容度高(4.82)。項目7：許容度低(3.86)>許容度高(3.47)。項目8：許容度低(5.55)>許容度高(5.42)。項目9：許容度低(5.25)>許容度高(4.92)。項目10：許容度低(5.49)>許容度高(5.28)。項目11：許容度低(4.02)>許容度高(3.76)。項目12：許容度低(5.10)>許容度高(4.89)。項目13：許容度低(5.03)>許容度高(4.59)。

表3 問題行動の善悪判断に関する項目別平均値(SD)

項目	許容度低群			許容度高群		
	小学校 ($N=189$)	中学校 ($N=215$)	高校 ($N=269$)	小学校 ($N=98$)	中学校 ($N=107$)	高校 ($N=394$)
1	4.97(1.04)	5.03(1.00)	5.14(1.21)	4.67(1.21)	4.28(1.20)	4.75(1.10)
2	4.03(1.07)	3.89(1.13)	3.84(1.27)	3.87(1.34)	3.64(1.29)	3.66(1.32)
3	5.66(1.07)	5.72(0.85)	5.64(1.10)	5.57(0.99)	5.49(1.04)	5.61(0.88)
4	5.18(1.27)	5.09(1.17)	4.58(1.53)	4.97(1.32)	4.71(1.39)	3.88(1.67)
5	4.85(1.42)	4.68(1.37)	4.06(1.67)	4.35(1.57)	4.17(1.48)	3.44(1.68)
6	5.16(1.13)	5.12(1.09)	5.12(1.23)	4.91(1.23)	4.74(1.15)	4.82(1.21)
7	4.56(1.26)	4.19(1.45)	2.83(1.67)	4.07(1.57)	3.74(1.55)	2.60(1.56)
8	5.60(1.04)	5.56(0.90)	5.50(1.10)	5.52(1.06)	5.35(1.06)	5.40(0.97)
9	5.39(1.15)	5.29(1.16)	5.06(1.49)	5.24(1.28)	4.80(1.51)	4.73(1.57)
10	5.55(0.99)	5.55(0.96)	5.37(1.20)	5.36(1.23)	5.28(1.09)	5.21(1.12)
11	4.13(1.20)	3.87(1.30)	4.05(1.46)	3.70(1.35)	3.80(1.36)	3.76(1.50)
12	5.07(1.16)	5.01(1.12)	5.20(1.24)	4.86(1.21)	4.85(1.24)	4.95(1.19)
13	4.93(1.19)	4.98(1.12)	5.17(1.22)	4.41(1.38)	4.55(1.36)	4.82(1.28)
14	5.00(1.23)	4.66(1.31)	5.00(1.33)	4.83(1.26)	4.43(1.42)	4.72(1.34)
15	5.21(1.12)	5.02(1.11)	5.15(1.21)	4.76(1.16)	4.59(1.34)	4.71(1.32)
16	5.42(1.11)	5.22(1.14)	5.23(1.24)	5.10(1.30)	5.02(1.20)	4.96(1.28)
17	4.11(1.45)	4.01(1.48)	4.03(1.61)	3.53(1.62)	3.45(1.42)	3.51(1.56)
18	5.14(1.18)	5.14(1.10)	5.19(1.22)	4.87(1.23)	4.76(1.30)	4.79(1.24)
19	5.42(1.14)	5.60(0.86)	5.53(1.16)	5.40(1.18)	5.50(0.91)	5.48(1.06)
20	4.15(1.51)	3.95(1.64)	3.10(1.72)	3.24(1.82)	3.39(1.58)	2.69(1.69)
21	4.71(1.30)	4.76(1.32)	4.68(1.41)	4.29(1.51)	4.25(1.40)	4.24(1.52)
22	4.88(1.24)	4.88(1.19)	5.03(1.35)	4.72(1.39)	4.56(1.25)	4.69(1.37)
23	4.93(1.26)	4.92(1.18)	4.92(1.30)	4.41(1.50)	4.43(1.39)	4.58(1.39)
24	4.95(1.31)	5.29(1.16)	5.12(1.35)	4.68(1.52)	5.04(1.34)	4.60(1.57)

項目14：許容度低(4.88)>許容度高(4.66)。項目15：許容度低(5.13)>許容度高(4.68)。項目16：許容度低(5.29)>許容度高(5.03)。項目17：許容度低(4.05)>許容度高(3.50)。項目18：許容度低(5.16)>許容度高(4.81)。項目20：許容度低(3.74)>許容度高(3.11)。項目21：許容度低(4.72)>許容度高(4.26)。項目22：許容度低(4.93)>許容度高(4.66)。項目23：許容度低(4.92)>許容度高(4.47)。項目24：許容度低(5.12)>許容度高(4.78)。

許容度×学校の交互作用は、項目1でのみ有意であった($F=3.85$, $df=2$, 1266, $p<.05$)。そこで、まず学校別に許容度の単純主効果を検定した。その結果、小、中、高ともに許容度低>許容度高であった(小は $p<.05$ 、中は $p<.001$ 、高は $p<.005$)。次に、許容度別に学校間差を検定した。その結果、許容度高で小<高>中の結果が示された($p<.001$)。

(4)得点間の相関値

問題行動に関する見聞実態・体験欲求・善悪判断の各項目得点と許容度得点について相関分析を行った。表4は、学校別・項目別に相関値を示したものである。

まず、見聞実態と許容度間の相関値をみると、高校では24項目すべての相関値が有意であった($p<.05\sim p<.001$)。小学校では項目4「たばこを吸う」を除く23項目で有意であった($p<.05\sim p<.001$)。また、中学校では項目9「学校にナイフを持ってくる」、項目20「髪の毛を染めたり、パーマをかける」、項目23「廊下で、さわいだり遊んだりして教室の授業のじゃまをする」の3項目を除く21項目で有意であった($p<.05\sim p<.001$)。

次に、体験欲求と許容度間の相関値をみると、小学校および高校では、24項目すべての相関値が有意であった(項目20の高校では $p<.01$ 、その他はすべて $p<.001$)。中学校では項目4「たばこを吸う」、項目7「学校でアメやガムを食べたり、ジュースを飲む」、項目9「学校にナイフを持ってくる」、項目20「髪の毛を染めたり、パーマをかける」、項目21「授業中に、かってに教室を出たり入ったりする」、項目22「人の傘や持ち物をかってに使う」、項目23「廊下で、さわいだり遊んだりして教室の授業のじゃまをする」の7項目を除く17項目で有意であった($p<.05\sim p<.001$)。

善悪判断と許容度間の相関値をみると、高校では項目2「そうじをなまける」、項目3「棒やナイフで人を傷つける」、項目8「人をおどして、お金や物をとりあげる」、項目10「お金を払わないで、店から品物を取ってくる」、項目19「犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける」の5項目を除く19項目の相関値が有意であった($p<.05\sim p<.001$)。また、中学校では次の10項目を除く14項目が有意であった($p<.05\sim p<.001$)。項目3「棒やナイフで人を傷つける」、項目8「人をおどして、お金や物をとりあげる」、項目10「お金を払わないで、店から品物を取ってくる」、項目11「授業中に、さわいだり、おしゃべりをする」、項目12「わざと人の持ち物をこわしたり、かくしたりする」、項目14「人の自転車にだまって乗る」、項目16「わざと学校のガラスや壁をこわす」、項目19「犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける」、項目22「人の傘や持ち物をかってに使う」、項目24「テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える」。最後に、小学校では、次の11項目で有意であった($p<.05\sim p<.001$)。項目1「人をなぐったり、けったりする」、項目5「お酒やビールを飲む」、項目7「学校でアメやガムを食べたり、ジュースを飲む」、項目11「授業中に、

表4 見聞実態・体験欲求・善悪判断と許容度間のピアソン積率相関係数

項目	見聞実態—許容度			体験欲求—許容度			善悪判断—許容度		
	小学校 (N=458)	中学校 (N=521)	高校 (N=1164)	小学校 (N=458)	中学校 (N=521)	高校 (N=1164)	小学校 (N=458)	中学校 (N=521)	高校 (N=1164)
1	.23***	.20***	.19***	.35***	.34***	.33***	-.15**	-.25***	-.13***
2	.30***	.18***	.13***	.38***	.18***	.23***	-.08†	-.10*	-.06†
3	.18***	.13**	.16***	.26***	.15***	.21***	-.01	-.08†	-.01
4	.05	.13**	.14***	.31***	.07	.21***	-.05	-.09*	-.18***
5	.23***	.11*	.16***	.34***	.16***	.20***	-.15***	-.13**	-.17***
6	.25***	.15***	.19***	.31***	.28***	.30***	-.07	-.10*	-.11***
7	.24***	.10*	.09**	.37***	.07	.13***	-.13**	-.12**	-.06*
8	.14**	.12**	.17***	.23***	.18***	.23***	-.00	-.07	-.04
9	.13**	.08†	.07*	.20***	.06	.15***	-.03	-.14**	-.10***
10	.18***	.14**	.13***	.21***	.12**	.19***	-.04	-.08†	-.04
11	.22***	.11*	.09**	.32***	.16***	.15***	-.19***	-.00	-.06*
12	.24***	.18***	.15***	.30***	.16***	.25***	-.08†	-.04	-.07*
13	.21***	.22***	.14***	.34***	.22***	.25***	-.17***	-.11*	-.10***
14	.18***	.16***	.16***	.27***	.20***	.19***	-.06	-.07†	-.10**
15	.27***	.15***	.18***	.33***	.26***	.28***	-.16***	-.13**	-.14***
16	.13**	.16***	.18***	.30***	.11*	.23***	-.09†	-.06	-.08**
17	.27***	.21***	.08**	.30***	.16***	.17***	-.18***	-.15***	-.14***
18	.27***	.20***	.17***	.32***	.27***	.30***	-.10*	-.14**	-.12***
19	.11*	.18***	.14***	.20***	.13**	.18***	-.01	-.04	-.01
20	.21***	.07†	.08**	.31***	.08†	.09**	-.22***	-.12**	-.10***
21	.28***	.10*	.13***	.30***	.04	.17***	-.13**	-.09*	-.10***
22	.14**	.09*	.13***	.16***	.08†	.21***	-.07	-.07	-.09**
23	.18***	.07	.15***	.31***	.08†	.19***	-.16***	-.10*	-.09**
24	.21***	.11**	.18***	.28***	.13**	.22***	-.08†	-.04	-.15***

注) †: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$.

さわいんだり、おしゃべりする」、項目13「人を仲間はずれにする」、項目15「人の欠点や知られたくないことを言って、からかう」、項目17「机や椅子に、落書きをする」、項目18「人のいやなこと、やりたくないことを無理にやらせる」、項目20「髪の毛を染めたり、パーマをかける」、項目21「授業中に、かってに教室を出たり入ったりする」、項目23「廊下で、さわいんだり遊んだりして教室の授業をじゃまする」。

考 察

本研究の目的は、暴力に対する許容度の高低が、(1)日常生活において暴力行為等に関する問題

行動を見たり聞いたりする見聞実態とどのように関連するか、(2)それらの問題行動を自分もしてみたいという体験欲求とどのように関連するか、(3)問題行動に対する善悪判断とどのように関連するかを検討することであった。

見聞実態、体験欲求および善悪判断の各得点について許容度の高低を含む2要因分散分析を行ったところ、以下の結果が得られた。暴力に対する許容度の高い児童生徒は、許容度の低い児童生徒よりも、(1)学校内外で様々な問題行動をより高い頻度で見聞するだけでなく、(2)そうした問題行動を自分でもしてみたいという体験欲求を強く持っていた。それに対して、問題行動に対する善悪判断では、(3)項目3「棒やナイフで人を傷つける」と項目19「犬、猫などの動物をいじめたり、傷つける」を除く22項目のすべてにおいて、許容度の高い児童生徒は低い児童生徒よりも、問題行動を悪くないと判断し、規範意識の低下を示した。なお、項目3と項目19では、許容度の高低両群ともに、非常に悪いことだと判断している点で、他の項目の結果とは異なっていた。

以上の結果は、暴力に対する許容度が高いか低いか問題行動の発現と関係することを実証するものである。すなわち、暴力を許容しやすい児童生徒は、そうでない児童生徒よりも、問題行動に興味・関心が高く、他の児童生徒の問題行動に注意を向けやすいのではないかと考えられる。そのために、同じ学校の児童生徒であっても許容度が異なれば、問題行動の見聞実態に相違がみられたのであろう。あるいは、暴力を許容しやすい児童生徒は自分から進んで、問題行動を見聞する機会を積極的に求めたのかもしれない。問題行動に対する興味・関心が高い場合には、見聞した問題行動を自分でも実行してみたいという気持ちが促進され、その結果として体験欲求が高まるのであろう。それと同時に、問題行動の実行を抑制する規範意識が低下するのではないかと考えられる。今後の研究では、こうした問題行動の発現メカニズムを解明すると共に、暴力に対する許容的態度が問題行動の見聞実態や体験欲求だけでなく、問題行動の実行にどの程度影響するのかを探究していかなければならない。

ところで、問題行動に関する項目のうち、以下の項目では許容度と学校の交互作用が有意であった。まず見聞実態では、項目17「机や椅子に、落書きをする」、項目20「髪の毛を染めたり、パーマをかける」、項目24「テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える」の3項目であった。体験欲求では、項目2「そうじをなまける」、項目4「たばこを吸う」、項目5「お酒やビールを飲む」、項目7「学校でアメやガムを食べたり、ジュースを飲む」、項目11「授業中に、さわいんだり、おしゃべりする」、項目16「わざと学校のガラスや壁をこわす」、項目20「髪の毛を染めたり、パーマをかける」、項目21「授業中に、かってに教室を出たり入ったりする」、項目23「廊下で、さわいんだり遊んだりして教室の授業をじゃまする」、項目24「テストのとき、人の答えや本をこっそり見て答える」の10項目であった。善悪判断では項目1「人をなぐったり、けったりする」の1項目のみであった。

これらの交互作用について、さらに検討した結果、許容度の高低間差は学校種によって異なることが明らかになった。すなわち、(1)小学生では、許容度高群が許容度低群よりも問題行動の見聞実態と体験欲求が有意に高く、善悪判断が有意に低かった。それに対して、(2)中学生では、見聞実態の2項目(項目20と24)と体験欲求の5項目(項目4、7、20、21、23)において、許容度高群と

低群間の差が減少し、有意差がみられなかった。(3)高校では、見聞実態の2項目(項目17と20)と体験欲求の1項目(項目20)において両群間の差が減少し、有意差がみられなかった。中学校や高校では、なぜ許容度の高低間に差がない項目が多くなったのであろうか。項目得点別に許容度高群と低群の平均値をみると、許容度低群の得点が高くなり、許容度高群の得点に近い値を示していることが分かる(表1～表3を参照)。特に中学生では、許容度が低い場合でも、問題行動の体験欲求が高くなっていることは注目される。ただし、これらの項目は、暴力行為等に直接関連する項目というよりも、授業妨害や校則違反等の逸脱行為が中心であった。それに対して、暴力行為等に直接かわる項目では、小学生から中学生を経て高校生に至るまで、暴力に対する許容度低群の体験欲求が高群よりも有意に低い点で一貫していた。すなわち、社会の判断基準が明確に定まっている暴力度の激しい問題行動では、小学生の段階から暴力に対する許容度の高低間に明確な差がみられる。それに対して、大人になると許容されるような飲酒・喫煙や服装・化粧あるいは学校でのマナーなどの問題行動領域では、中高生になると暴力に対する許容度の高低間差が減少し、低群の自己規制力が緩みやすくなるといえる。したがって、深刻な問題行動領域では、本研究の最年少学年である小学校5、6年生以前の段階から、暴力を許容しない毅然とした態度や規範意識を育成することが問題行動の予防につながると指摘できる。また、逸脱行為等の軽度の問題行動領域では、特に中学生の頃に自己規制力が緩みやすいので、規則の意味を再確認させると共に、軽度な問題行動でも他者に迷惑や有害的影響を与えることを考えさせるような予防的指導が大切であるといえる。

引用文献

- 小嶋佳子・松田文子 1999 中学生の暴力に対する欲求・規範意識，加害・被害経験，および学校適応感 広島大学教育学部紀要 第1部(心理学)，48，131-139.
- 少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議 2001 心と行動のネットワーク—心のサインを見逃すな，「情報連携」から「行動連携」へ— 教職研修，6，152-164.
- 総務庁青少年対策本部(編) 2000 青少年の暴力観と非行に関する研究調査 総務庁青少年対策本部

付記

本研究は、広島県教育委員会と広島大学との共同研究プロジェクト「生徒指導上の問題行動に関する専門的な研究プロジェクト」の「暴力行為等の問題行動に関する研究プロジェクトチーム」が実施した平成12年度の調査データの一部をまとめたものである。また、本研究は平成12年度教育学部共同研究プロジェクト推進経費の援助を受けて実施されたものである。調査対象校の児童・生徒の皆さんをはじめ、先生方、ならびに関係者の皆さんに心から感謝の意を表します。